

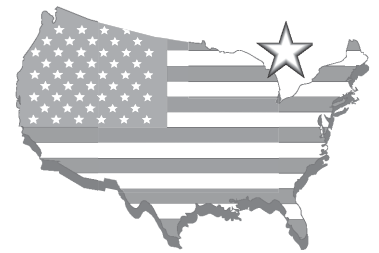


Tokyo, JAPAN

アメリカ留学自己変革記 (1)

早稲田大学政治経済学部4年

宇野 真弘



Wisconsin, U.S.A.

はじめまして。早稲田大学政治経済学部四年の宇野真弘と申します。2008年9月から2009年6月まで、大学の交換留学プログラムを利用して、ウィスコンシン州のローレンス大学に留学することが決まっています。この留学の目的は、自己変革を起こすことです。リレーエッセイではその体験を記していきたいと思います。

1. 留学に向けてー被爆地を訪れるー

私は今、広島にいます。被爆国である日本に生まれた者として、核のもたらす悲劇がどんなものであるかを世界に伝えられなければならない。留学を前にして、そう強く感じるからです。

原爆被害を無言で伝え続ける原爆ドーム、そして原爆投下の背景や被害状況を克明に語る平和記念資料館は、核の廃絶を訴える強い力を持っていました。特に、被害状況の数値的検証

には、核の脅威を示すに十分な説得力があります。しかしながら、私にとって最も重要に感じられたのは、原爆死没者追悼平和記念館におさめられた被爆体験記です。なぜなら体験記は、データだけでは浮かび上がってこない被爆時の風景を映し出すことができるからです。

たとえば、爆心地から1.2キロ以内にいた人の50%が即死、3.5キロ以内の人は熱風による火傷をおったといわれています。その意味するところは、

まさに信じられないような悲劇です。ところがこの数値だけを見ても、分かったようでいて現実のこととしては理解できない。それに比べて被爆者一人ひとりの体験記は、現実の世界にどのようなことが起きたかを知らしめてくれます。

当時14歳で高等女学校2年生だったある女性は、爆心地から1.8キロ以内で被爆しました。建物の陰にいたため火傷は免れましたが、飛んできた瓦で右足を打撲してしまいます。山へ避難する際には黒い雨に遭いました。焼け野原と化した街を我が家へと向かう間、馬かと思うほど大きく膨れて仰向けに転が

っている死体や、全身ずるむけで髪もちりちりに焼けているため男女の区別も年齢も分からぬ人たを踏まないように歩きます。走っている格好のまま焼け死んだ少年の死体もあります。また道中、「水を飲むと死ぬぞ」と叫ぶ声が聞こえてきたけれど、どうせ助かるか分からないのだから楽にしてやろうと、「水ください」という声にこたえ、焼けて開きにくくなった口に水

を流し込んでいきます。彼女にとっては、今でも眼裏には焦げた人々が、臭覚には焦土のにおいがよみがえり、「忘れてしまいたい」と「忘れてはならぬ」が交錯するのです。

原爆投下の惨状や非人道性を理解するには、データだけでなく、こういった体験記からのミクロな理解が必要です。そこには、マクロの視点からでは知ることのできないミクロの悲劇が存在するからで

す。昨今、キッシンジャー元国務長官を含む米国政界の重鎮らが「核のない世界」の実現を呼びかけ始めたこと、米国の民主・共和両大統領候補ともに核廃絶に前向きであること、英国の元外相らも核廃絶を訴え始めたことが、核廃絶へ向けた大きな潮流のきっかけになるのではと期待されています。このような潮目での留学においては、核問題についての活発な議論ができるでしょう。そのなかで、そういったミクロの視点からの理解を促していかなければならないと感じます。



広島：原爆ドームを訪れて